



Title	自然免疫応答を活性化する新規リガンドとしての環状ADPRの同定 [全文の要約]
Author(s)	石, 姝珣
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第14959号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/86050
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。; 配架番号 : 2700
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	SHI_Shuxun_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文（要約）

自然免疫応答を活性化する新規リガンドとしての
環状 ADPR の同定

(Identification of Cyclic ADP-Ribose as a Novel Ligand for
Innate Immune Activation)

2022 年 3 月

北海道大学

石姝珣

学位論文（要約）

自然免疫応答を活性化する新規リガンドとしての
環状 ADPR の同定

(Identification of Cyclic ADP-Ribose as a Novel Ligand for
Innate Immune Activation)

2022 年 3 月

北海道大学

石姝珣

学位論文 (要約)

【緒言】

自然免疫システムは、ウイルスや細菌などの病原体の感染時にいち早く認識および排除する生体の仕組みである。細胞膜や細胞質に局在し、病原体特有の病原関連分子パターンを認識するパターン認識受容体を認識すると、下流のシグナル伝達し、抗ウイルス活性をもつインターフェロンを含むサイトカインの発現を誘導する。このようなパターン認識受容体のうち、細胞質において二本鎖 DNA を認識するセンサーである cGAS (cyclic GMP-AMP synthase; cGAS) は、細胞質で DNA を認識すると活性化し、環状ヌクレオチド cGAMP (cyclic-GMP-AMP) を合成することで、下流のアダプター分子 STING 依存的にサイトカインの発現を誘導する。近年、このように環状ヌクレオチドを介して自然免疫応答を活性化や制御に関与する事例がいくつか報告された。外因性および内因性環状ヌクレオチドはさまざまなセンサーやそのシグナル伝達経路の制御に関わっていることから、環状ヌクレオチドに着目してさらに検討することは自然免疫応答への理解のための重要な課題である。

このような環状ヌクレオチドを類似した構造を有するものの中に環状 ADP-リボース (cyclic ADP-ribose; cADPR) が知られている。これは、従来の狭義の環状ヌクレオチドや環状ジヌクレオチドであるリン酸基-リボース (OH) 結合構造は異なり、リボースの 5'位 (OH) が 2つのリン酸基とつながり、1つのアデニンだけで環状になっているユニークな特徴を有している。マウス個体の血清、脾臓、胸腺、骨髄組織など様々な組織で検出される。cADPR の合成酵素としては、主に造血系および非造血系細胞において発現する CD38 (cluster of differentiation 38) や CD157 (cluster of differentiation 157)、主に脳などの組織で局在している SARM1 (sterile alpha and TIR motif-containing 1) が知られている。cADPR は、小胞体に局在するリアノジン受容体と結合して活性化させ、そのチャネル活性依存的に Ca^{2+} を放出させることで、インスリン分泌の調節、心筋や骨格筋、平滑筋の収縮、好中球の走化性と T 細胞の活性化、神経分泌細胞の増殖の促進と分化の抑制など様々な作用を持つが、いずれの cADPR の機能もその Ca^{2+} 調節の機能で説明付けられてきた。そのため、cADPR の Ca^{2+} 非依存的な機能についてはこれまで明らかにされておらず、また、自然免疫系での役割についても不明である。そこで私は、cADPR が内因性の環状ヌクレオチドとして病原体に対する自然免疫応答に関与すると仮説を立て、自然免疫シグナル経路への関与の検討を試みた。

【実験方法】

本研究では、がん単球細胞系 THP-1 や初代培養細胞 HELF (human embryonic lung fibroblasts)、HCoEpiC (human colonic epithelial cells) および末梢血単核細胞を用いた。細胞への環状ヌクレオチド、各種核酸リガンドや siRNA の導入にはそれぞれ Lipofectamine 2000 や Lipofectamine RNAiMAX を用いた。細胞内の Ca^{2+} 濃度調節にはカルシウムキレート剤を用いた。細胞培養上清に分泌された IFNs や炎症性サイトカインは、酵素結合免疫吸着測定法で測定した。遺伝子発現量の検証は細胞から抽出した全 RNA を用いて cDNA を合成し RT-qPCR で解析した。タンパク質発現量の確

認は SDS-PAGE で分離し、イムノブロットィングや CBB 染色で確認した。cGAS 欠損 THP-1 細胞は LentiCRISPRv2 システムを用いて作成し、*in vitro* 実験に用いたリコンビナントタンパク質は大腸菌に発現させ精製した。ISD のビオチン化には Label IT® Biotin Labeling Kit を用いた。分子間の相互作用は、バイオレイヤー干渉法やプルダウンアッセイを行った。

【結果】

環状ヌクレオチドである cADPR、cGAMP を THP-1 細胞内に導入すると IFN- β 、IFN- λ 、および IL-6 の誘導が認められた。一方で、ADPR や cAMP の場合はそれらの誘導産生は認めなかった。さらに直接培地に cADPR を添加しても IFN- β は確認できなかった。このことから cADPR は細胞内で自然免疫応答を活性化することが示唆された。しかし、カルシウムキレート剤の投入や、cADPR による Ca^{2+} 濃度制御応答に重要な受容体である RYRs をノックダウンしても、その IFN- β の誘導に変化が見られなかった。つまり、細胞内 cADPR による IFN- β の誘導は、 Ca^{2+} 濃度の変化に依存しないことが示唆された。次に、cADPR が活性化する自然免疫シグナル経路を探索するため、細胞内 PRRs とその下流タンパク質の関与を検討したところ、IRF-3、STING、cGAS の関与が認められた。さらに、cGAS 欠損細胞株を樹立し、それを用いて確認すると、cADPR による IFN 応答が喪失した。これらの結果から、cGAS 依存的に IFN 応答が誘導されることが明らかとなった。次に、cADPR を細胞内に導入することで、cGAMP 量の増加が確認された。バイオレイヤー干渉法やプルダウンアッセイにより、cADPR と cGAS の直接結合が認められ、特に cGAS の DNA 結合部位の 1 つである Zn-thumb 構造で結合することが示唆され、cADPR が cGAS の DNA 結合領域を介して会合することが明らかとなった。

【考察】

cADPR は直接結合することで cGAS の cGAMP 産生能を活性化することをはじめて見出し、cGAS の DNA 結合部位のうち二量体化に重要な Zn-thumb 構造部位で結合することから、おそらく二量体化に関わることが予想されるが、その詳細な分子機構については今後の課題であると考えている。また、このシステムの生物学的意義についても今後明らかにしていきたい。cADPR が cGAS を活性化させるという生体システムがなぜ存在するのか、という点であると認識している。そのための手がかりとして、cADPR はいつ、どこで合成されるか、どの生体部位で cGAS を活性化するのかを明らかにすることが今後の焦点となる。将来的には、病原体感染、がん、自己免疫疾患などの病態理解や治療法などの観点から、臨床に応用できる分子基盤を引き続き探究していきたい。

【結論】

本研究では、環状ヌクレオチドである cADPR が cGAS と直接結合することで cGAS-STING-IRF-3 シグナル伝達経路を活性化し、I 型および III 型 IFNs や炎症性サイトカインの産生を誘導することをはじめて明らかにした。特に、これまで知られていた、細胞内のカルシウム調節のセカンドメッセンジャー分子としての機能とは異なり、カルシウムを返さず直接結合の形で自然免疫を活性化する役割を果たすのは新しいポイントを示された。今回の研究では、cADPR が内因性の cGAS リガンドとして働く可能性を示唆した。